

『陸奥話記』の清原武則

Kiyobara Takenori on Mutsuwaki

前九年の役（一〇五一～六一 奥州十二年合戦）、後三年の役（一〇八三～八七）を経て、源氏は東国武士団と強固に結びつき、武門の棟梁としての地位を固めていった。源頼義・義家父子の時代である。

『陸奥話記』は、その源氏興隆期の前半、奥州の俘囚安倍氏の専横から始まって、源頼義がこれを滅ぼすまでの一連の経緯を扱うものである。安倍頼良（後に頼時と改名）は、父祖の代からの俘囚の長として、奥六郡に勢力を振るい、義務である税も納めず、徭役も勤めなかった。永承年間（一〇四六～五三）、当時の陸奥守藤原登任の安倍氏討伐失敗を受けて陸奥守に任じられた源頼義は、結果十二年を掛けて、安倍氏一族を滅ぼしたのであった。

『陸奥話記』は、「追討將軍」源頼義の任命から始まり、安倍氏の滅亡を経て、「將軍」頼義ほか官軍の功労者への論功行賞で終わる。この構成は、一見、謀反人追討の物語であるかのような印象を与える。しかし、物語の中に隠されていたのは、頼義が陸奥国に強い執着をもち、例えば国守の任期が切れても陸奥に居座り新任の国司

の着任を妨害する等、きわめて強引な手法で安倍氏討伐を強行しようとした事実であった¹⁾。それでも『陸奥話記』自体は、少々は不手際ながら、頼義の野望を「追討の物語」の枠に押し込めている。この『陸奥話記』における「追討の物語」としての性格は、頼義を一貫して「將軍」という呼称で呼ぶあり方について論じた先考²⁾においても確認したところであり、『陸奥話記』はやはり「將軍」源頼義による謀反人安倍氏追討の物語であるといつて差し支えないといふのが私の考えである。

では、後の史家が認めるように前九年の役が源氏の武士団への成長のきっかけとなったとして、『陸奥話記』は源氏の興隆の物語であるのか、というのが次の課題である。後の多くの軍記物語、たとえば『保元物語』『平治物語』や『平家物語』などは、源氏が平家を討ち滅ぼし鎌倉幕府が成立した後日の視点に立って、特定の出来事を予兆としてとらえる視点が明白に見られるが、『陸奥話記』にはそれが顕著ではない。神意によって示される奇瑞はわずかに八幡神の使者とされる鳩が軍勢の上を翔る場面が二度。一度は出羽国山

安藤 淑江（人間発達学部 教養部会）

北の俘囚清原武則が頼義の軍勢に合流し、その武則が天皇家に忠誠を誓い、全軍が氣勢を上げる場面において、

今日有鳩、翔軍上。將軍以下、悉拜之³。

鳩が軍勢の上を飛翔し、頼義以下が皆がこれを拜んだとある。もう一カ所は、安倍氏の最後の拠点となった厨川・姫戸柵の合戦に、苦戦した頼義が皇城を拜し八幡三所に祈願する場面において、

是時⁴有鳩、翔軍陣上。將軍再拜。

鳩が軍陣の上を飛翔し頼義がこれを再拜している。そして、この時、頼義の祈願通りに「暴風忽起、煙焰如飛」たちまち暴風が起こり炎が敵陣に燃え移ったのであった。鳩の飛翔は奇瑞ではあるが、これは頼義の祈願を八幡神が容れた印であり、後になって、これを「何事かの予兆であった」と解釈しているのではない。『陸奥話記』におけるこのような奇瑞の場面は、後世の視点に立って、騒乱を源氏興隆の基と位置づける視点によるものとは言えない。

そのことは義家の扱いにも現れている。源義家は頼義の長子で、八幡太郎と称され、後には源氏の伝説的な祖先となっていく。したがって、もし仮に『陸奥話記』が将来の源氏の興隆を視点に据えようとするものであるならば、頼義⇨義家父子の血脈は強調されて然るべきである。しかし、現実には義家の活躍を詳述する場面は意外に少なく、また描写は観念的であり精彩を欠く。

義家の名が『陸奥話記』で最初に現れるのは、安倍氏を討つべく追討將軍に任命された頼義の人となりを、いかにも追討將軍に相応しい人物として紹介する場面においてである。

上野守平直方朝臣。感其騎射、……則納彼女為妻、令生三男二女。
長子義家、仲子義綱等也。

頼義の武芸に惚れ込んだ平直方の娘を妻として、儲けた三男二女の長子として義家の名が語られている。

安倍氏を討つべく陸奥守兼鎮守府將軍として赴いた頼義であるが、赴任の当初に恩赦があり、頼義は安倍氏を討つ大義名分を失う。安倍氏もまた恭順の意を示し、頼義の陸奥守任期中の五年間は何事もなく平穩であった。しかし、任期満了間近に阿久利川事件が起きて、両者は対決する。その最初の衝突の場面、また次いで引用される安倍頼時（⇨頼良）討伐を報告する天喜五年九月の国解に義家の名はない。頼義の近辺にいなかった可能性も皆無ではないが、物語の中で確認できる術はない。遠方にいた義家が父の元に駆けつけた、などの記述はなされていない。

義家が登場するのは、安倍頼時（⇨頼良）殺害後、続けて安倍一族討伐の戦いを挑んで逆に壊滅的な敗戦を喫した黄海の戦いにおいてである。

將軍長男義家、驍勇絶倫、騎射如神。冒白刀突重圍、出賊左右。

以大鎌箭頻射賊師。矢不空発、所中必斃。雷奔風飛、神武命世也。夷人靡走。敢無当者。夷人立号曰八幡太郎。

義家の驍勇、神業ともいえる騎射の技で、圧倒的に不利な戦いの中、ただ一騎、安倍氏の軍勢を圧倒しているありさまを描いている。父頼義は騎射の技に優れ、それを見込まれて平直方の女を妻としたのだが、その長子義家も父の血統を受け継ぐものであった。物語は義家の騎射を「神業」という。しかし描写はあくまで「神のようだ」「百発百中」を越えるものではなく、観念的で具体性を欠くものであることは指摘しておきたい。

この黄海の戦いでは、頼義の軍勢は僅か七騎にまで討ち尽くされ、

頼義・義家の馬も敵の矢に倒れる、という窮地に陥るが、義家らの奮戦ぶりに敵が恐れをなし、彼らは何とか無事に逃れることができたのであった。とはいえ、義家の騎射も他の者の活躍も、

而義家類射殺魁師。又光任等数騎殊死而戰。賊類為神、漸引退矣。とはなはだそつけない描写に尽きるのである。

黄海の戦での大敗後数年に亘って、頼義は安倍貞任らの横行に為す術のない状態が続いた。しかし清原武則の参戦を得て、安倍氏討伐が再開される。その中、小松の柵の合戦で、

義家・義綱等、虎視、鷹揚。斬将拔旗。

とされる。敵軍を威圧し立ち向かう姿であるが、描写ともいえない観念的叙述である。一連の合戦の中で義家の名が現れるのは、わずかにこれらの部分だけである。

物語の集結部近くに官軍の論功行賞についての叙述がある。

同二十五日除目之間、賞勲功、拜頼義朝臣為正四位下伊与守。太

郎義家為從五位下出羽守。次郎義綱為右衛門尉。武則為從五位下鎮守府將軍。獻首使者藤原季俊為右馬允。物部長頼為陸奥大目。

論功行賞に関わる叙述は以上で全てである。父頼義の「正四位下伊与守」に次いで、義家は「從五位下」の位と「出羽守」の官職を得ている。義家の昇進は父頼義への褒美の一部としての性格も有している。しかし実際の戦闘においても、義家は相当の活躍であったことは想像に難くない。黄海においても小松柵においても、一騎当千の活躍をしたに相違ない。しかし、今も述べた通り、物語中の義家の活躍は観念的描写に留まり具体性を欠く。また、「長子」とい

う言葉以外に、頼義の後継者としての性格付けは行われていない。『陸奥話記』に義家を頼義の後継者として称揚し、その立場を明確化しようという視点はなにも等しいといえよう。

このように存在感の希薄な義家であるが、具体的な行為の中に射芸を現す場面が『陸奥話記』の中にただ一カ所だけ存在する。

合戦之際、義家每射甲士、皆応弦死矣。後日武則語義家曰。僕、欲試君弓勢、如何。義家曰、善矣。於是、武則重堅甲三領、懸之樹枝。令義家一發、貫甲三領。

合戦の際の義家の一射必殺の騎射を見た清原武則が、後日その弓勢を試したのである。頑丈な鎧を三領重ねて木の枝に掛け、義家に矢を放たせると、その矢は三領重ねた鎧を貫いてしまった。武則は驚愕して、義家を神明の変化かと述べた。そしてそのような騎射の技のために、義家は武士たちの信頼を集めたのだという。義家の神業のごとき射芸が、武則の求めに応じて三領の鎧を射通すという行動を通して表現されている。

鎧は基本的には矢に対する防護具である。後に『保元物語』に登場する源為朝（義家には孫にあたる）もその弓勢で敵を圧倒する。七尺にあまる身長、左手が右手より四寸も長いという「生付タル弓取⁴」としての身体。為朝は「フトサハナガ持杓ノ如」き八尺五寸の弓で、十八束の矢を引くのである。その為朝の弓勢は、白河殿大炊御門西門で先を進む伊藤六の鎧の胸板を貫通し、続いていた伊藤五の射向の袖（鎧の左肩を覆う部分）に裏まで突き通って、清盛配下の武士たちを恐怖させる。この場面が『保元物語』の語り手は、先述の義家の試技を想起している。『陸奥話記』が語る義家の試技は、

その弓勢を伝説化した。義家の射芸は、木に掛けた三領の鎧を射通してみせる、という具体像において、初めて「伝説」として語り継がれ始めるのである。そして、それは戦闘の場における義家の活躍そのものではなく、その騎射に驚いた武則が、試技を要請したことにより始まったのであった。

源頼義の安倍氏討伐の合戦に、長子義家の具体像が乏しいことは前述した通りである。たしかに、『陸奥話記』自体が、後の軍記物語とは異なり、合戦に赴く一人一人の武人の人生にまで踏み込んでその生死を賭けた戦闘を描き込むような合戦描写を行っているわけではない。それでも、例えば衣川関の合戦において、一兵士の資質を見込んで特異な命令を下した清原武則と、生命を賭して川を渡り、期待以上の活躍をして勝機を作った「兵士久清」の物語が存在するように、主従の絆も、ひとりひとりの登場人物の活躍も、語り手の目に止まってはいるのだ。

跋文に言う。「今抄国解之文、拾衆口之話、注之一卷」『陸奥話記』の成立に関わって常に引用される一文である。一つは「国解之文」すなわち、乱に関わって国衙から都に送られた文書の類、もう一つは人々の間に語り伝えられたこと、というより戦闘の参加者の体験譚が巷間に広まったもの、『陸奥話記』は二つの構成要素を持つ。義家ほどの武芸の持ち主が活躍しなかったはずはないし、その活躍が人々の耳目を驚かさなかった筈はない。そもそも、義家に試技を求めた清原武則は、『陸奥話記』が義家の騎射が百発百中だったと述べる黄海の戦ではまだ参戦しておらず、その参戦は六年後、頼義が懇切な要請を続けた結果であった。したがって、武則の見た義家

の射技は、武則らが援軍として参戦してから安倍氏を討ち滅ぼすまでの短期間に継続された一連の合戦の中のことであったに違いなく、したがって、戦場が多方面に拡大したために『陸奥話記』の情報網から義家の活躍が漏れてしまったとは考えにくい。義家の具体像が乏しいことに対しては、なんらかの理由があるはずである。

清原武則の参戦から後の叙述について考察する。

清原氏は出羽国山北の俘囚（朝廷に従属した蝦夷）である。同じく陸奥国奥六郡の俘囚である安倍氏も、居住する地域こそ違え同じ俘囚である。源頼義の俘囚対策は、奥州俘囚の勢力関係を利用すること、安倍氏討伐に他の俘囚の力を利用するのが作戦であったと目される。安倍頼時（＝頼義）殺害に成功したときも、

使金為時・下毛野興重等甘説奥地俘囚、令与官軍。

と、まず使いを送って「奥地の俘囚」を説得し味方にすることから始めている。使者となった金為時自身も、姓名から判断して俘囚である可能性が強い。説得は功を奏し、

飽屋・仁土呂志・宇曾利、合三郡夷人、安倍富忠為首発兵従為時と、奥地の俘囚は金為時に従った。安倍頼時は、その奥地の俘囚に対し、自ら少数の配下と共に説得に赴き、戦闘の中で流れ矢に当たって死去したのであった。

黄海の敗戦後、安倍貞任らの専横に為す術のない状況に陥った頼義が、山北の清原氏に助力を求めたのもおなじ流れであろう。「常以甘言、説出羽山北俘囚主。清原真人光頼・舎弟武則等、令与力官軍」とある。今回も俘囚同士の勢力争いを利用し、勝利の暁の利益供与を約束した、と理解できる。しかし清原氏は簡単には動かず、頼義

は重ねて様々奇珍な贈り物を続け、漸く光頼・武則の清原氏も頼義に味方することを許諾したのであった。

その清原武則が一門の子弟と一万余の兵を率いて参戦することによって、源頼義の安倍氏討伐の戦は勝利へと導かれる。武則を迎える頼義の軍勢が「三千余人」というから、どれほど強力な助力であったか想像に難くない。この段階で、頼義はすでに二度目の陸奥守の任期が満了している。朝廷は高階経重を新たな陸奥守に任命し、経重は勇んで入国するも、陸奥の人民が従わず、間もなく帰京するという事件が起きる。朝廷ではそのことが問題視されたが、頼義は清原氏に派兵を要請し続けている。

康平五（一〇六二）年秋七月、清原武則は発進、八月九日頼義と武則は栗原郡たしろのおか岡で出会う。『陸奥話記』には割注があつて、次のように記している。

昔、田村麻呂將軍、征蝦夷之日、於此支整軍士。自其以來、号曰營。壘迹猶存。

両者が出会ったこの地は、坂上田村麻呂が蝦夷征伐の時に軍士を整えたという故地であったのだ。頼義はこの地に「至（到着した）」、武則は「軍（軍だちした）」というから、どちらが田村麻呂に進えられているか、といえは、武則の方であることは間違いない。その点、思い合わせられるのは、坂上田村麻呂の最初の蝦夷征伐のことである。延暦一三（七九四）年、この時征夷大使は大伴弟麻呂、田村麻呂は副使の一人であったが、『日本紀略』に「副將軍大宿禰田村麿已下征蝦夷」とあるように、戦果はひとり田村麻呂に帰すべき

大活躍であったのだ。『陸奥話記』の中で「將軍」は頼義。武則は「副將軍」と称されることはないが、以下に見るとおり、参戦後の武則は、まさに「副將軍」さながらに頼義に従い、軍勢の中で重要性をますます増大させながら、頼義を物心両面で支え統けるのである。

清原武則の率いてきた軍勢は一万余、頼義の軍勢は三千余。新たな軍勢が編成されるが、主要な部分は清原氏の一族が固めることになる。武則は皇城を拝して忠誠を誓う。

臣既發子弟、応將軍命。志在立節、不顧殺身。若不苟死。必不空生。八幡三所、照臣中丹。若惜身命。不致死力者、必中神鎬先死矣。

身命を賭けた活躍を誓い、八幡三所に照覧あれと述べる武則の言葉に、全軍は奮い立つ。その「全軍」とは、清原氏の軍勢がほとんどを占める軍勢であることを忘れてはならない。頼義の軍（「官軍」）に組み込まれ、天皇に忠誠を誓うことが、山北の俘囚たちにとって、軍をあげて発奮するに足る何事かがあるということである。

武則の誓いを神が容れた印として、八幡神の使者である鳩が軍勢の上を翔る。武則の軍勢は、まずは頼義軍（「官軍」）に一体化されたのである。

そのような中で、武則は頼義を支えていく。

最初の軍は小松柵においてである。安倍宗任の叔父僧良昭の守る柵である。日取りが悪く、日も暮れてきたので、頼義軍に攻撃のつもりはなかったが、偵察に出かけた武貞・頼貞の供の歩兵が柵外の小屋に火を放ち、戦闘が始まってしまった。頼義は、予定に反する戦闘の開始に対して、

但兵待機発、不必撰日時。故宋武帝不避往亡、而功。好見兵機、可随早晚矣。

と述べている。宋の武帝が凶日である「往亡」を避けずに戦をして戦効をあげた先例に触れつつ、戦というのは日時^{トキ}の吉凶ではなく機会を選ぶべきあり、機会をよく見てさつさとそれに従うの^{トキ}がいいのだ、というのだ。それに対して、武則は、

官軍之怒、猶如水火。其鋒不可当。用兵之機、不過此時。

と返答する。官軍の士気の充実ぶりを語り、今が戦の好機であると答える。頼義の言葉を受容し支える発言である。そしてその言葉どおりに武則は騎兵・歩兵を進めたのである。

小松柵は堅固な要塞で武則配下の騎兵・歩兵は難渋したが、同じく武則配下の「兵士深江是則・大伴員季等」が死をも恐れぬ二十余人を引き連れて城内乱入を断行、突破口が開かれた。頼義指揮下の坂東の精兵たちも活躍している。なお、このような一兵士の名が残るのは、武則配下の者に限られる。俘囚の軍勢の結束力の高さ、武則の掌握の度合いの高さを物語るものといえよう。

「官軍」は、兵士の休息、武器の整備のため、あえて追撃をさけたが、それに長雨が重なって停滞の日時がかさみ、糧食が尽きた。安倍氏に指導されて横行するゲリラへの対応、また食料入手のため、半数弱の兵士が陣営を離れて各地に赴いた。陣に残る兵力は六五〇〇人。安倍貞任は「官軍」陣営の警備の手薄を噂に聞き、好機とばかりに八〇〇〇余の大軍を率いて、襲いかかってきた。「玄甲如雲、白刃耀日」とある。貞任軍の兵卒たちの黒い鎧が雲のように押し寄せ、白刃は日に煌めいた。圧倒的、威圧的な様相である。

六

しかし武則は頼義の前に進みでて、祝福して「貞任失謀。将梟賊首」と述べた。これは貞任の失策である、きつと敵の首を挙げることができるだろう、と。頼義は、貞任は勝利を確信して襲ってきたはずだとして、武則の判断の根拠を尋ねた。武則は答える。官軍は遠くからやってきたもので、戦いを継続する食糧が不足している。一気に戦闘に持ち込んで勝負を決することが望みである。もし安倍氏の軍勢が要害を固めて長期戦を意図するならば、官軍は疲弊して長く戦闘を継続することはできない。それどころか逃散する兵が出れば、却って敵に討たれてしまうであろう。それが官軍の弱点であり、武則が恐れるところである。しかし、貞任は軍を進めてきた。これは天が頼義に幸運をもたらしたものである、と。また、賊軍には「悪い気」が見えるとも言っている。このような武則の見解に、頼義は、「子言是也。吾又知之」と、武則の言葉に同意し、自分もまた承知していると述べる。

最初の小松柵の戦では、予想外の小競り合いから意図せず始まってしまった戦いに、まず頼義が積極的な評価の姿勢を見せ、これに武則が追隨していた。今回は武則の方が積極的に状況分析を示し、これに頼義が同意する形であることを確認したい。

ただし、この問答の中で、頼義は武則のことを「子」と呼んでいる。対等あるいはそれ以下のものに対する対称である。武則は頼義のことを「將軍」と呼んでいる。また、頼義の言葉の中に「昔勾踐用范蠡之謀、得雪会稽之恥。今老臣因武則之忠、欲露朝威之嚴」というくだりがある。越王勾踐が范蠡の知略によって会稽の恥を雪いだように、自分は武則の忠義によって朝廷の威信を示そうとしている、というのである。ここでは武則が、頼義に従属する立場を堅持

しつつも、状況を主導するほどに強力な補佐者となっている様相が見て取れる。

頼義は身を賭して戦うように命じ、武則は応諾する。武則の忠誠を誓う言葉を受けて頼義は布陣、七・八時間に及ぶ合戦の末、官軍は勝利、貞任らは逃亡。さらに武則は頼義の命によって追撃、貞任の陣中に忍び込んで放火、貞任軍は混乱の中で多くの死傷者を出し、衣川の関に逃げ去った。

衣川関の戦においても、「官軍」の主たる兵力は武則とその一族たちである。衣川関は險阻で、官軍は攻めあぐねた。これを解決したのは武則で、兵士久清に命じて、その身軽さを利用して灌木伝いに川を渡り敵陣に火をかけさせた。久清は期待以上の働きをし、官軍は関を破ることができた。『陸奥話記』はこの武則の指示の言葉や久清の活躍を特筆する。特徴あるとはいえ、このような一兵士すら掌握しているのが武則なのである。

次いで官軍は鳥海柵に入る。鳥海柵は安倍頼義（頼時）が死んだ場所でもある。安倍氏の宗任・常清らは、戦わずして去り厨川柵に移った。ここでも、頼義と武則の応答が記されている。

頼義は言う。

頃年、聞鳥海柵名、不能見其体。今日、因卿忠節、初得入之。卿見予顔色如何。

頼義は、名前は聞いても見るのがなかった鳥海柵に自分が入っていることの満足感を表し、それが武則の忠節のお陰であると謝意を伝える。そして、「自分の顔色をどうみるか」と武則に問う。武則

に対する対称が、それまでの「子」から「卿」に変化しており、敬意の程度が上がっている。武則の答えは、

足下多宣為王室立節、櫛風沐雨、甲冑生蟻虱。苦軍旅後、已十余年。天地助其忠。軍士感其志。以是、賊衆潰走、如決積水。愚臣、擁鞭相従。有何殊功乎。但見將軍形容、白髮返半黑。若破厨川柵得貞任首者、鬢髮悉黑、形容肥滿矣。

とある。武則は、最初に陸奥守に就任した永承六（一〇五二）年以來の頼義の苦節と忠義を想起する。そして、今賊徒が遁走したのも、天地がその忠義を照覧し、兵士がその志に感服したからである、と手柄を頼義に譲り、自分は頼義に従っただけだ、と、一歩さがる姿勢を見せている。さらに武則は頼義の容貌に関して、白髪だったものが、半分黒く戻っている、厨川の柵を破って貞任の首を得るなら、完全に黒髪に戻り、身体も肥え太るであろう、と述べる。頼義が先に自分の顔色をどう見るかについて尋ねたのは、武則に自分の満足度を伝えたかったのであろう。これを受けて武則は、安倍氏討伐まであと一歩に迫った満足が頼義のこれまでの苦勞をほとんど吹き飛ばしていること、また、次に控える厨川柵を打ち破り貞任の首をとることで勝利が完璧なものになるだろうと祝福しているのである。

この武則の返事に、頼義は、さらに言葉を重ねて、武則の一族率いての参戦、また戦闘における活躍を指摘し、自分が目的を達することが出来たのは武則のお陰であるから、謙遜して手柄を譲る必要はない、と述べる。そして、「但白髮返黒者、予意然之」白髪が黒く戻ることについては、自分もその通りだと思おう、と、武則の祝福を承けて、勝利の確信を口にする。ここでも、先に最後の勝利に言及し予祝するのが武則で、頼義は後からそれに同意している点は興

味深い。

九月十六日から始まった厨川・樞戸柵の攻撃は難渋を極め、頼義軍は多数の死者を出した。翌十七日、村落の屋舎を壊し運んで城の溝に沈め、萱草を刈って川岸に積んで火攻めの準備が始まった。頼義は皇城を拝して八幡三所に祈願し、風を出して敵柵を焼くよう祈った。頼義が自ら神火と称して火を投じたその時、鳩が軍勢の上を飛ぶ。神が祈願を容れた印の奇瑞である。暴風が起こり、煙焔が飛び、形勢は逆転した。しかし、猛火に死にもぐるいとなった敵兵の突撃に、官軍は多数の死傷者を出してしまう。

この時、智恵を見せたのも武則であった。武則は「開圍可出賊」と命ずる。わざと囲みを開いて敵が逃げ出す余地を作ったのである。生き延びられるかな、と思った敵は、たちまち逃走を開始。「官軍」は逃げたい一心で戦意をなくした相手を悉く殺害したのである。武則は戦闘の最終局面を、的確な判断で乗り切ったのである。ここに厨川柵の戦は終結し、一連の残党刈りを経て安倍氏は滅亡する。武則はその後も貞任の子千代童子を助命しようとする頼義に対し、後の災いの種になるから、と処刑を助言している。

出羽国山北の俘囚清原氏は、安倍氏討伐に苦戦した源頼義に「甘言」とともに援軍を求められ続けていた。戦勝の暁の利益供与が「甘言」の内容だと推定される。清原氏は当初は躊躇していたが、清原武則が一族を率いて参戦する。武則は八幡三所に誓詞をささげ、軍勢は八幡神に認められて「官軍」に一体化する。始めは「將軍」頼義を支える立場だった武則は、徐々に「官軍」の中で占める重要性

を増していき、大切な局面で自ら積極的に趨勢を決する力をもつに至る。『陸奥話記』の成立については「抄国解之文、拾衆口之話」とされ、黄海敗戦時の佐伯経範の討ち死にまつわる話、出家して頼義の遺体を探そうとした藤原茂頼の話、貞任の首級の髪を梳るための自分の垢櫛を使わざるを得ないことを嘆く元従者の話、など多くのエピソードが指摘されている。また、武則自身が当事者の語りをなした（＝武則の体験譚が『陸奥話記』の材料の一部になっている）可能性も指摘されている。『陸奥話記』には、文書（「国解の文」など）として引用されている部分以外にも、報告書から抄出されたのではないかと思われる部分が多数存在する。例えば、戦闘の場面で当事者名と結果（これに想像だけで書けるような観念的な描写が加わる）に終始する類である。武則の関わる場面は、抽象的な言辞ではなく、たとえば、この手順が描写されたり、一兵士の挙措が記されたりと、生硬ながらも戦語りへのふくらみを感じさせる。義家の弓勢を試みてその神業ともいえる一面を明らかにしたのも武則であった。

戦後行われた論功行賞により、源頼義は正四位下伊豫守になった。太郎義家は従五位下出羽守、次郎義綱は為右衛門尉に昇進した。武則は従五位下鎮守府將軍に任命された。一時は圧倒的に不利な状況にあった安倍氏との戦い、そこに清原氏の援軍を求めた頼義の「甘言」は、安倍氏滅亡後、武則の鎮守府將軍就任によって、完結したと見ることはできないだろうか。「子」から「卿」へ、変わっていく頼義の武則への呼びかけ。頼義を支える立場から先導する立場へと変化する武則の発言。『陸奥話記』が源氏の家の隆盛を見据えた物語になっていないことは冒頭で述べた通りである。『陸奥話記』

においては、「將軍」源頼義の安倍氏追討の物語に寄り添うように、清原氏の勢力拡大・武則の鎮守府將軍後継の物語が、成り立っているのではなからうか。

- 1 高橋崇『蝦夷の末裔 前九年・後三年の役の実像』中央公論社 一九九二・九ほか
拙稿「征夷の物語としての『陸奥話記』——頼義の「將軍」呼称をめぐって」名古屋芸術大学研究紀要 第三二巻 二〇一・三
- 2 本文は『新編日本古典文学全集 将門記・陸奥話記・保元物語・平治物語』小学館 二〇〇二・一〇 による
- 3 本文は『新編日本古典文学全集 将門記・陸奥話記・保元物語・平治物語』小学館 二〇〇二・一〇 による
- 4 本文は 半井本『新日本古典文学体系 保元物語・平治物語・承久記』岩波書店 一九九二・七